

『壊れた恋の直し方』

著:水戸 泉

ill:北沢きょう

「こちらで待たせてもらってもよろしいですか」

「はい、どうぞ」

松本は椅子を勧めた。とはいうものの、取調室に応接セットなどあるはずもなく、勧めたのはパイプ椅子だ。

一応茶を出しておくべきかと松本が来客用の湯飲みを取り出すと、椅子に座ったまま早瀬が、サイドボードの上に置かれたティーセットを指さした。

「それ、白川警視正の趣味でしょう」

「そうです」

この早瀬という官僚は、恐らく白川のことをよく知っているのだろう。しかし、相手の身分が諜報員だと知れると、どうにも居心地が悪かった。松本はそれ以上どう答えていいのか考え倦(あぐ)ね、とりあえず早瀬の分の紅茶を淹れた。

「どうぞ。緑茶のほうがよろしければ、今お持ちします」

「いや、僕も紅茶は好きです。しかし」

早瀬は、上品に笑って言った。

「彼はこれを、飲まないと思いますよ。賭(か)けてもいい」

「……は？」

会話の前後から察するに、『彼』とは白川のこと間違いなさそうだ。どうして白川がこれを飲まないのか。松本が怪(け)訝(げん)に思っている間に、やっと白川が現れた。

いつものように挨拶もなく、無言で部屋に入ってきた白川は、最初に松本に目を遣(や)って、それから早瀬に気づき、露(ろ)骨(こつ)に嫌な顔をした。

「……おまえか」

白川が『おまえ』と呼ぶ程度には、二人は親しいのだということを松本は察した。が、親しいと呼んでいいものかどうかは、未だ保留にすべきだと直後に考えを改めた。

早瀬は、椅子から立ち上がることもせず、白川に向かって言った。

「ちょっとご挨拶に。本当はそちらから来て戴(いた)だきたいんですが」

「なんの用だ」

とりつく島もなく、白川が答える。この態度に比べれば、自分に対する接し方はまだ優しいほうだったのだと松本は知った。

早瀬のほうは、白川の冷淡な態度などものともせず、微笑みを湛(た)えてる。が、それを言う時は、さすがに声を少し潜(ひそ)めた。

「解散総選挙が近いです。あまり派手なことはしないでくださいね」

白川は、諾(たく)とも否(いな)とも答えない。松本は、話を聞いていないふりをして白川の分の紅茶を淹れた。白川は松本からティーカップを受け取ったが、意識は早瀬のほうへ向けられたままのようだ。

松本は考えた。解散総選挙の具体的な可能性や時期は、まだどこからも報道されていない。するとこれは、公安調査庁独自のリークと見なしていいのだろう。

(派手なことをするな、というのはつまり、昨日みたいなことはするなってことか?)

それとも、別のことを指しているのか。松本が考えている間に、白川がぽつりと呟いた。

「……………まずい」

「え」

こちらも別のことを考えていて上(うわ)の空(そら)だった松本は、はっとして白川が持っているティーカップを見た。

『彼はこれを飲まない』という早瀬の予言は外れたが、その予言の意味は、はっきりと開示された。

白川はカップをテーブルに置くと、事務機の抽(ひき)斗(だし)を指さして言った。

「その抽斗に、ティーバッグが入っている。今後はそれを使い」

「わかりました」

素直に頷きつつ、だったら最初からそう言えよと松本は内心、呆(あき)れた。要するに白川は、松本がコンビニで買って来た安物の茶葉が口に合わなかったのだろう。

それを見ていた早瀬が、また朗(ほが)らかに笑う。

「賭けは僕の負けだな。匂いで気づくと思ったのに、何か別のことを考えていて上の空だった。違う？」

白川はその指摘を、完璧に無視した。が、例によって早瀬は、まったく傷ついた素振りも見せない。

少し考えて早瀬は、急に松本ににじり寄った。松本は思わず、一步後ろに下がる。白川とは対照的な、陰のない美貌がすぐ目前に迫ってきていた。

耳元で、蠱(こ)惑(わく)的な声が囁(ささや)いた。

「負けただから、松本くんには何か対価を支払わないとね」

「え、え…………？」

意味がわからず、肩を強(こわ)張(ば)らせている松本の耳に、何かが触れた。それが早瀬の唇なのだ気づいた時には、松本は白川に腕を掴まれ、乱暴に引き寄せられていた。

体はそれほど大きくなくても、元は機動隊に在籍していたくらいだから、松本は体力には自信がある。その松本が蹠(よ)踉(ろ)けるほど、白川は強く松本の腕を引っ張ったのだ。お陰で松本は、白川の胸に抱かれる羽目になった。

強(したた)かに鼻をぶつけ、松本は抗議する。

「ちょ、あんた…………乱暴ツ…………」

「賭けなんかしてたのか」

逃(に)がさないように松本の両腕を掴み、白川は詰(きつ)問(もん)するような口調で聞いてきた。松本は顔を上げ、怒って言い返す。こちらもやはり、顔が近い。

「してませんよ」

「うん。僕が勝手に賭けてただけ」

助け船のつもりなのか、早瀬が片手を挙げて自己申告する。が、白川はそれでも松本を離さない。

「なんなんですか！」

いよいよ松本が本気で怒り、白川の腕から強引に逃れる。その時、平素は無感情な白川の目に、何かしら感情めいたものが浮かんだのは気のせいなのだと松本は思い

たかった。わけがわからなかったからだ。

そんな二人の遣り取りを目前にして、早瀬はますます笑みを深めている。何か、温厚そうだった彼の顔が、急に意地悪く見え始めたのは気のせいだろうか、松本は嫌な汗をかいていた。

早瀬は二人を交互に眺め、意味深に言った。

「ていうか、久嗣、部下入れたんだ。ふーん。そうかー」

(久嗣……?)

それが白川のファーストネームなのだと松本が思い出すのに、三秒かかった。この白川を、ファーストネームで呼び捨てにする者がいること自体が、あまりにも意外すぎた。が、白川と早瀬の間柄が親しいのだとはどうしても思えない。なぜなら白川はその時、恐ろしい顔で早瀬を睨(にら)んでいたからだ。

(なんなんだ、この人たち……)

呆れる松本の肩をぼんと叩いて、早瀬は出て行く。早瀬の手が松本の肩に触れた途端、白川は松本の肩を抱いて自分のほうに引き寄せた。都合、二人の男に奪い合われた松本は、ただ呆(ぼう)然(ぜん)と見送るのみだ。

(本当に、なんだったんだ……)

二人のエリート官僚の遣り取りは、松本の理解の範(はん)疇(ちゆう)を遥かに超えていた。

本文 p76～82 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>